

ゴールデンターキンの妊娠期・授乳期および幼齢期の栄養と仔の成長

太田 真琴

(よこはま動物園)

よこはま動物園では2015年までに4個体のゴールデンターキン (*Budorcas taxicolor bedfordi*) を飼育してきたが、いずれも一般的に知られる体重を下回っていた。そこで2016年度以降新規来園した成長期の2個体の飼料中粗蛋白質含有率をそれまでの個体より増加させた給餌内容で飼育したところ、2個体の体重はともに調査期間を通じて同月齢期の同性の過去個体を上回った。しかし来園までの2年弱の間の栄養状態や母個体の妊娠期・授乳期の栄養状態については不明であったため、2019年によこはま動物園で生まれた2個体の雄について異なった栄養条件で飼育し、その成長の度合いを体重で比較するとともに過去によこはま動物園で誕生した個体との給餌内容の差異も比較することで、母個体の妊娠期・授乳期の栄養状態や幼齢期の栄養状態の相違が成長の相違に及ぼす影響を検討した。

2019年2月22日に生まれたNo.7: 雄は母親の妊娠期・授乳期・自身の幼齢期の給餌内容に占める粗蛋白質の割合がそれぞれ12.23%・12.41%・12.54%であり、1歳10か月齢時の体重が161.5 kgであった。2019年12月21日に生まれたNo.8: 雄は同様にそれぞれ10.04%・10.04%・10.20%であり、1歳10か月齢時の体重が136.6 kgであった。この2個体間では飼料中の粗蛋白質含有率の高かったNo.7: 雄がNo.8: 雄に対し常に同時期の体重が上回っていた。さらに、初めて測定した体重が2歳10か月齢の65.5 kgであった2012年2月24日生まれのNo.4: 雌については母親の妊娠期・授乳期・自身の幼齢期の給餌内容に占める粗蛋白質の割合が文献上はいずれも8.74%であり、この3個体の飼料中の粗蛋白質含有率と体重を基準とした成長度合いとの間に相関がみられたことから、母個体の妊娠期・授乳期や自身の幼齢期の飼料中の粗蛋白質含有率が成長に影響を及ぼしていることが示唆された。